

回胴倒錯者

- PACHISLO FREAK -

革命児4

目押しで止まる機種があったらなあ……。目押しのできる人なら一度は誰でも考えることだ。もちろんそんな機種など出るはずも無いと考えていた。しかし意外や意外「目押しで止まる機種が登場するらしい！」その情報は知識大王S君から飛び込んできた。その機種の名は「ウルトラマン倶楽部3」（サミ1）。新たに搭載された機能により、巷では発売される前から話題騒然としていた機種である。その機能は今では全く見なくなってしまうが「CT（チャレンジタイム）」というものだ。ある条件を満たせば、リールが目押しで直ちに停止するようになるシステムである。この機能により、小役を目押しで揃え出玉を稼ぐことができたのだ。もちろんボーナス絵柄だけはいくらビタ押ししてもテンパイまではいくが、最後のリールでスベリ揃わない仕組みになっていた（リプレイは通常通りの確率で発生し、狙わなくてもスベって揃う）。CTの終了条件は「規定の純増枚数越え・規定ゲーム数消化ボーナスに当選」このいずれかに該当したとき終了となる。

そしてさらに目を見張るのが、設定6の破格の機械割り。なんとフル攻略で140%を越える代物だった。この機械割りは当時としては初の破壊的数値で、それまでの「良くて120%」を大幅に上回る数値だった。まさに設定6に座れば万枚確定というスーパーエグストラ設定だったのだ。

ウルトラマン倶楽部（以後マンクラ）は間もなくホームゲームラウンドのP店にも導入され、私も期待感いっぱいマンクラに臨んだのだ。新台初日は夕方6時オープンで、残念ながらマンクラに座ることはできず、背中合わせの

コンドルをチャマチながら、マンクラを観戦していたのだ。マンクラの角台に座っていた30代半ばくらいの男性は、CTに突入すると、なかなか華麗な目押しで小役をハシバシと揃え、瞬く間にメダルを出している。しかし、突然小役が揃わなくなり、たまに小役が揃う程度になっていたり、揃わなくなったというより、わざと外しているような打ち方だ。そしてそれは起った。第1リールがズルつとスベリ、下段に赤い7が並んだのだ。「CT中は目押しで直ちに止まる。つまりビタ止まりでありスベることは無い。しかしスベれば、ボーナスかりプレイということになるのか」それを見て私は、なるほど！と納得した。つまりこういうことだ。CT中にもボーナスは抽選していき、規定の純増枚数を越えたとCTは終了してしまう。以上の2点を踏まえると、規定の純増枚数を越える寸前の枚数を維持して打ち続けられ、メダルを減らさずにCTの規定ゲーム数を消化するまではボーナスの抽選を受けることができるということだ。（ちなみにマンクラは規定の純増枚数は200枚、規定ゲーム数99ゲームだった）

反面、目押しのできない人たちには非常に厳しく、CT中なのにメダルは減り続け、見ても無残な姿であった……。こういう人が意外にも多かったからなのかどうかは不明だが、全てのリールがビタ止まりするCTマシンはマンクラのみで、以後に発売されたCTマシンには第一停止リールにアシストスベリが搭載されるなど、比較的簡単に小役が取れるようになっていた。

誤算

あくる日、滅多に早くから並ぶことのない私だが、開店1時間近く前からP店に並んでいた。もちろん目的はマンクラ。そのゲーム

性、攻略性が私のビタ押し魂とスロット魂をくすぐったのである。

先頭に並んでいた為、難なくマンクラゲット。ちなみに2番目に並んでいたのはS君で、朝も早くから私に叩き起こされ、無理やり付き合わされたのだ。S君と並んで座り、遊技開始。なんだか面白くない。リール配列といい、制御といい……。チェリーは7枚チェリーと1枚チェリーがあり、双方を同時に狙うのは不可能。さらに15枚役のレッドキングの目押しがめんどくさい。始めはしっかり狙っていたが、こくたまにしか出ないレッドキング狙いに嫌気がさし、左に頻繁に出現する1枚チェリーを狙うのみで、あとは全開適当押しに切り替えたのであった。

ついでにリール制御について少し説明すると、当時は大きく分けて2つの制御があった。コントロール制御といわれるものと、テーブル制御と言われるものだ。前者は成立した役を最大限引き込もうとする制御で、やたらスベることが多い。スベって小役が外ればチャンスとなる。このころのサミーはコントロール制御が非常に多かった。コントロール制御の魅力は、「さっきはこの目目が入っていなかったのに、今回は入っていた」等の曖昧さや「ズル」とスベって小役ハズレの爽快感などが挙げられる。一方、後者のテーブル制御はあらかじめ決められているテーブル（法則表みたいなもの）によって停止目目が決定する。無数の法則をレバロンで抽選する仕組みだ。同じベルでも内部では数通りのベルに分けられており、押し位置により揃い方が違う等、多数の演出を生み出すのに非常に効果的だった。この制御により、大量リーチ目が可能となったのである。このころからコントロール制御は激減し、今現在の機種はまず間違いなく、ほぼテーブル制御だろう。なかには兄弟機でありながら、コントロール制御と

テーブル制御を使い分けている機種も存在した。代表的なものとして「玉緒でボン」と「玉緒でボン1DX」（前者がコントロール制御、後者がテーブル制御）が挙げられる。この2つの機種は記憶に残っている方も多いたのではないだろうか。

マンクラもコントロール制御だった。変則押しをする簡単なガセリーチ目が出せた。なぜなら、小役又はボーナスに当選していない限りは変則押しをするとビタ止まりするからだ。右から押しすればボーナスか小役。この打ち方もはつきりって面白くなかった。私のスロット人生で最も適当にリールを止めていた機種は間違いなくマンクラだ。今振り返れば、設定6の圧倒的な出玉とCT中のスベリだけがこの機種の面白みだったような気がする。

話を本題に戻そう。私もS君もそれなりにボーナス、CTに当選し、ハズシ&CTを完璧にこなして徐々に出玉を増やしていた。しかし設定6ではなさそうだった。設定5で1/210、設定6で1/143、設定6だけ異様に

A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。



甘い。私の左隣の青年が明らかに設定6だ。CTの消化が遅い為それほど出ていないが、全くムラらずボーナスの連打。心の中で、「いいなあ、ヤメないだろうなあ」と思っていると、その青年は3000枚ほど出た所でヤメていった。もちろんささずゲット！まだ時間は夕方4時。あと6時間もあれば十分だ。それから猛烈な勢いでブン回し、閉店前にはなんと7000枚をゲットしていた。S君も夕方5時にヤメていった人の後にさすりで、5000枚。その後数週間、出たところでヤメていく人の後に座って、かなりの出玉をゲットしていた。他の人はなぜ爆裂確定の設定6の台をヤメていくのだろうか？と疑問に思っている方も多いのではないだろうか。その理由はすごく簡単で、爆裂すること「知らない」だけである。それも無理はなく、機械割り140%というのはスロット史上例を見ない破格の数値だったからである。当時、「設定6は負けなし設定」という認識だけであり、「万枚出る設定」とは誰も考えなかったのだ。そしてこのマンクラを機に「6だけ爆裂設定、6なら万枚確定、6はエグストラ設定」という機種が続々と現れたのである。そう考えるとこのマンクラが後のスロット業界に多大な影響を与えたことが見て取れる。当時の機種では1日座ってせいぜい5000枚。それを考えたら5000枚程出たところでヤメていくのにも納得がいく。しかしマンクラは出続けるのである。この「ヤメていく現象」は私にとつてうれい誤算だった。P店もマンクラ人気の為か増台し、ずらりと1列がマンクラに変身した。しかし期待とは裏腹に増台した時あたりから人気急降下し、マンクラの島にはチラホラとお客が座る程度になっていた。そんな私もマンクラには「ヤメた後」にしか座ることなくなくなり、コンドル、タコスロなどを打ちながら6が空くのをまっていたのであった。6が空

けば急いでゲットする、そんなことを繰り返している、回りの若者も真似をだし、6をゲットすることが困難になっていた。さらには店側も6を使わなくなり、マンクラの島は衰退が加速しついに島から消え去っていったのである。ウルトラマン、3分の男、帰るのは文字通り早かったのであった。

N君

大阪でマンクラの人氣が落ちてきたころ、名古屋に住む兄貴から電話があった。

兄「明日、近所に超大型のパチンコ店がグランドオープンするぞ」

私「ふーん」

兄「さらに、オープンは全台設定6ついでう噂や、夕方6時オープンやけどな」

私「まじっ！行くわ。この時期ならマンクラ入れるやろ！」

こんな感じで名古屋行きが決定した。急ぎ準備をして出発した。

名古屋に到着し、兄貴宅に入ると懐かしい顔がそこにはあった。東京の大学に進学したにもかかわらず、標準語について行けずし名古屋のC大学に進学しなおした中学・高校時代の友人N君である。N君とは今でも頻繁に一緒に遊ぶ仲で、このコラムも欠かさず読んでくれていた親友だ。兄貴とは私を通じて仲良くなり、名古屋ではあまり友達のない彼らはよくつるんでいるようだった。そしてN君も当たり前のようにスロットのとりこになっていた。もちろんN君は負けている。そういう男なのである。そして次の日以來、私の友弟子となる男である。技術も知識も身につけ、確実なる勝利をつかんだ弟子はWさんが明らかに1番だ。しかし、スロットを



設定6のみエグストラ設定の元祖。あまの突出しな数字に誤植かと思えど、後の爆裂マシンの火付け役。

こよなく愛し、負けても負けても打ち続ける直向さは間違いなくN君が一番であり、一緒に打っていて楽しいのもN君が一番である。勝つても負けても笑って済ませるのだ。非常にお金離れの良い男なのでいつもお金はない。たまたま大勝ちした次の日に、同じ台にそっくりそのまま返金するなど、非常に潔い男でもある。

明日はN君も参戦して3人で行くことが決まった。マンクラの6。この時期にマンクラの6が打てるなど、まずありえないだろう。何がなんでもマンクラをゲットしたい。多分他のスロットたちも同じことを考えてくるに違いない。早く並ばなくては！私は2人にマンクラのすごさを熱心に説明しまくった。しかし反応はいまいち。「とりあえず並びに行こ！」と焦る私を尻目に「……早すぎやろ。」明らかにそういう表情をした二人の顔。そんな2人の意見など聞く耳も持たず、私は2人を無理やり連れ出しT店に向かったのである。時間は深夜0時。開店の18時間前だというのに……。

次回予告

はたしてA氏はマンクラに座れるのか!? そして兄貴とN君が選んだ機種はいったい……。今でも笑ってしまう2人の機種選びに乞うご期待！